「ジョアシャン・デュ・ベレ論」に見る ペイターの巨視的批評態度

——サント＝ブーヴとの比較において——

十枝内 康隆

1

十九世紀の英国におけるいわゆる「印象批評家」の代表者としてしばしばウォルター・ペイター（Walter Horatio Pater）の名があげられるが、彼と対になる作家を欧州大陸に求めるならば、まずサント＝ブーヴ（Charles-Augustin Sainte-Beuve）が思いうかぶであろう。『ルネサンス』（*The Renaissance: Studies in Art and Poetry*）における「序論」（'Introduction'）こそは「印象批評家」ペイターのマニフェストと考えて差し支えないが、そのなかで彼は批評家の従うべき第一の規則として、サント＝ブーヴの 'De se borner à connaître de près les belles choses, et à s'en nourrir en exquis amateurs, en humanistes accomplis'（xxi）という言葉を引き、みずからの批評原理を代辯させている[1)]。またイアン・フレッチャー（Ian Fletcher）が述べるように、両者に藝術家の「人物像」を重視する態度が顕著であることをもって、その批評における共通項とみなすことも可能である[2)]。たしかに彼等の間には、一見したところ、多くの重なりあう点が存在するのかも知れない。

サント＝ブーヴは1828年『ロンサール詩抄』（*Choix des Poésies de Ronsard*）ならびに『十六世紀フランス詩および演劇に関する歴史的・批評的概観』（*Tableau historique et critique de la poésie française et du théâtre français au seizième siècle*）と題する書物を編纂、刊行する。彼こそはこれらの著述によって長く忘れ去られていたプレイヤード派（La Pléiade）の詩人たちを十九世紀に復権させた功績者であった。

続いて、サント＝ブーヴは後に『新月曜閑談』(*Nouveaux Lundis*)に収められることになる「シャルル・マルティ＝ラヴォー氏編『ジョアシャン・デュ・ベレ仏語著作集』評」(*Oeuvre Française de Joachim du Bellay, Gentilhomme Angevin, avec une Notice Biographique et des Notes par M. Ch. Marty-Laveaux*)を1867年「知識人雑誌」(*Journal des Savants*)に発表する。

このサント＝ブーヴによるプレイヤード派復権活動を追うように、ペイターも1873年『ルネサンス』初版において「ジョアシャン・デュ・ベレ論」('Joachim du Bellay')を発表する[3)]。ペイターがみずからの論攷を執筆するにあたって、サント＝ブーヴの影響下にあったことは、ジョン・J・コンロン(John J. Conlon)の研究[4)]や、カルフォルニア大学出版局版『ルネサンス』における、ドナルド・L・ヒル(Donald L. Hill)の詳細な注釈が示すとおりである。また平川祐弘もペイターの記述に『新月曜閑談』の読書経験が反映していることを示唆している[5)]。

しかしながら、ペイターの論調はサント＝ブーヴと相当のくい違いが見られる。最も端的なものは、コンロンの指摘するように、ペイターがプレイヤード派の運動をひとつのまとまったものとして捉えている点であろう。このプレイヤード派内の統一は、サント＝ブーヴが求めつつもついに得られなかったものであった[6)]。

以下、本論においては、ペイターの提唱するプレイヤード派内部に見られる統一性を、サント＝ブーヴの記述との対照によって検討しつつ、そこからサント＝ブーヴの方法とは異なるペイター独自の批評原理を考えてみたい。そこにはひたすらに事実を重んじ、それを離れ得ないサント＝ブーヴの微視的論述と、反って、事実に拘泥するよりも、みずからの印象に忠実に、ルネサンス、およびプレイヤード派詩人における精神の統一、発展、継承を見出し、それを重んじようとするペイターの巨視的な態度との対照が見られるであろう。

2

ペイターもサント＝ブーヴもともにデュ・ベレの『フランス語の擁護と顕揚』(*La Défense et Illustration de la Langue française*) の歴史的意義を高く評価し、これをフランス文学史に現れた最初の自国語擁護論と位置づけている。サント＝ブーヴは、実際、この宣言文の発表をもってフランス十六世紀をふたつに分断しているほどである[7]。

だがペイターの論調は要所要所においてサント＝ブーヴとかなりのずれを見せている。たとえば「デュ・ベレ論」の中でペイターがつぎのようにルネサンスの特質をまとめている箇所がある。

We are accustomed to speak of the varied critical and creative movement of the fifteenth and sixteenth centuries as the *Renaissance*, and because we have a single name for it we may sometimes fancy that there was more unity in the thing itself than there really was. Even the Reformation, that other great movement of the fifteenth and sixteenth centuries, had far less unity, far less of combined action, than is at first sight supposed; and the Renaissance was infinitely less united, less conscious of combined action, than the Reformation. But if anywhere the Renaissance become conscious. . . if ever it was understood as a systematic movement by those who took part in it, it is in this book of Joachim du Bellay's. . . . (127)

かくして、ペイターはルネサンスにおける統一された意識の存在を示唆する。もちろん、ここでペイターがルネサンスと呼んでいるものを、中世期におけるいわゆる十二世紀ルネサンスから、十六世紀フランスにいたるまでの、ヨーロッパのほぼ全土において孜々と営まれた運動にあてはめることは不可能である。ここで彼の唱えるルネサンスとは、あくまでもフランス十六世紀、それも十六世紀中葉に活躍した一部の詩人たち、今日プレイヤード派と呼ばれる詩人たちの間に芽生えたで

あろう自覚を指すものであり、ペイターはそこに意識的に統一された運動が存在していたと主張するのである。

『擁護と顕揚』を中心として、プレイヤード派の詩人たちの間に意識的に統一された運動が存在していたと主張するペイターに対し、サント＝ブーヴは、この書によって統括されるようなルネサンス像を必ずしも抱いていない。たとえば彼は、『擁護と顕揚』の1561年版に、デュ・ベレを悼んで、ドラ（Jean Daurat）によるギリシア語の詩が付け加えられたことを指摘し、フランス語を擁護し高めようとしたこの書の巻頭に古典語による詩が書かれたという事実に目を向ける。

… cette contradiction piquante exprime bien la confusion du temps.... On ne se débarrase pas du jour au lendemain des habitudes invétérées, et les générations, quoi qu'elles en aient, demeurent enchevêtrées plus qu'elles ne le voudraient les unes dans les autres. (13: 283)

彼は、書物として『擁護と顕揚』が辿ったこの矛盾にプレイヤード派内部の乖離を見る。サント＝ブーヴはそこに時代の混乱と、同世代人の間の複雑な関係とを読みとろうとするのである。

実際のところ、今日プレイヤード派として総称される七人の中で、ドラただひとりだけはフランス語による著作を残していない。彼は派内随一の古典学者であり、その文章はいずれもラテン語もしくはギリシア語によるものである[8)]。したがって、『擁護と顕揚』を中心に、国語運動の側面からプレイヤード派を統一的にとらえようとしても、ドラの存在のみで破綻をきたしているといわざるを得ない。ところが、ペイターはドラの著作に見られるこの性格を故意に無視しているとしか思われない。

また、同じ『擁護と顕揚』の、全く同一の箇所を取扱ってさえ、両者の見解にはかなりの相違が見られる。たとえばペイターは『擁護と顕揚』の一節を飜訳して読者に示す。

"Languages," . . . "are not born like plants and trees, some naturally feeble and sickly, others healthy and strong and apter to bear the weight of men's conceptions, but all their virtue is generated in the world of choice and men's freewill concerning them. Therefore, I cannot blame too strongly the rashness of some of our countrymen, who being anything rather than Greeks or Latins, depreciate and reject with more than stoical disdain everything written in French; nor can I express my surprise at the odd opinion of some learned men who think that our vulgar tongue is wholly incapable of erudition and good literature." (128-129)

ヒルがその注釈において述べているように、ペイターとサント＝ブーヴのこの発言に対する反応は対照的なものである[9)]。ペイターの態度は、あくまでも好意的であるのに、サント＝ブーヴはこの同じ箇所を俎上にあげ、つぎのような言辞をもって批判する。

Du Bellay a sur l'origine des langues une idée fausse, abstraire, rationnelle. . . . C'est déjà la doctrine du rationalisme appliquée aux langues. . . . Cette idée de Du Bellay est déjà une idée à la Descartes, à la Condillac, à la Condorcet. (13: 301)

ペイターはあくまでも、自国語を高めようというプレイヤード派の統一された意識に目を向けようとするがゆえに、この発言と関係する言語哲学的問題はあえて無視している。ところが、サント＝ブーヴは一字一句を解剖せずには済ませないその周到さによって、かえって全体の統一を得られないのである。一方で、ドラの存在の無視といい、また言語哲学的問題の捨象といい、ペイターは事実関係を故意に歪曲していたり、それを避けて通っていると考えられなくもない。ところが、その歪曲や回避のゆえにこそ、彼はプレイヤード派の全体像を摑み取り、その本質を的確に記述することができるのである。ペイター

の批評には、自分の得た印象を忠実に再現するために、あえて細部を捨ててかえりみない大胆さがある。

3

ペイターはフランスにおける中世とルネサンスの連続性を強調する。彼はフランス・ルネサンスの藝術に関して、それをイタリアからの輸入品ではなく'the finest and subtlest phase of the middle age itself, its last fleeting splendour and temperate Saint Martin's summer' (124) だと語っている。フランスは中世においてさえ、ある種の洗煉を持ちあわせていた。すなわちフランスの文学が中世を通してその最も優れた例のなかに保持していたもの、ペイターが'a certain nicety, a remarkable daintiness of hand'また'a light, aerial delicacy, a simple elegance' (124) と呼ぶものを持っていた。プレイヤード派の運動も、ペイターによれば、たとえばラブレーにおいて見られるような粗野な要素を軟化し匡正することにあったとされるのである。

To effect this softening is the object of the revolution in poetry which is connected with Ronsard's name. Casting about for the means of thus refining upon and saving the character of French literature, he accepted that influx of Renaissance taste, which, leaving the buildings, the language, the art, the poetry of France, at bottom, what they were, old French Gothic still, gilds their surfaces with a strange, delightful, foreign aspect. . . . He reinforeces, he doubles the French daintiness by Italian *finess*. (125)

しかしながら、フランス藝術がルネサンスを前にしてすでに備えていたこのような性質は、あくまでも不意に窺われるものにすぎない。これをより高次の意識的な次元において示したものが、プレイヤード派の運動なのである。ペイターがプレイヤード派の詩人たちのうちに

見、評価したものは、その諸作が有する洗練、それも中世以来のフランスの伝統を受けつぎながら、それに加えた高度に言語的な洗煉であった。また、それは言語と不即不離の「スタイル」に対する極めて尖鋭な意識に裏付けられている。

For there is *style* there; one temper has shaped the whole; and everything that has style, that has been done as no other man or age could have done it, as it could never, for all our trying, be done again, has its true value and interest. (133)

この言葉がペイター自身の作品に向けられたものだとしても、何の違和感もない。鮮烈な言語意識と独自なスタイルは十九世紀英国においてペイターが求め、得たものと明確な類似を構成する。ここにペイターはみずからの批評態度との著しい共通点を見出して、共感をおぼえたのである。

なお、付言するならば、デュ・ベレ自身はそれまでのフランス詩をことごとく否定する立場に立っていた。彼は自分が中世以来の伝統を高めようとしていることに気づかなかった。『擁護と顕揚』第二巻第二章冒頭においては、鋭い逆説を用いてこう述べられている。

De tous les anciens poètes français, quasi un seul, Guillaume du Lorris et Jean de Meung, sont dignes d'être lus, non tant pource qu'il y ait en eux beaucoup de choses qui se doivent imiter des modernes, comme pour y voir quasi comme une première image de la langue française, vénérable pour son antiquité.[10)]

つまり、中世とデュ・ベレによって総括されるプレイヤード派詩人たちとの間の連続性を見出したのは、ペイター自身の功績であり、発見である。彼がもし資料にのみ従って、みずからの捉えたものを捨てていたとしたら、この発見は得られなかったであろう。

古代文化の復興という意味でのルネサンスは十二世紀からはじまっていたとするのが、現在での通念である。だから、今道友信の語るように藝術史におけるルネサンスに対応するものを思想史上に求める場合、十四世紀以降を一区切りとして、それをヒューマニズム、人文主義の時代と呼ぶことは適切である。十四世紀イタリアのヒューマニストが古代文化を復興するにあたってまず第一に考えたことは「人間の言語を本式に学ぶためには、自分たちの使っている言語の源流になるところのギリシア語やラテン語を勉強」しなくてはならないということなのであり、「彼らの主張は、人間的ということを、言語的と考え、しかもその言語の精華を研究する」というものであった[11]。この言語意識の高まりが、それ以降ヨーロッパの各地で、古典語以外の、母国語による文学作品の執筆という活動につながっていく。そして、これをフランスにあてはめるならば、絶えず言語意識に裏付けられて活動していた最後の人文主義者たちが、統一的な見解に達することの出来た唯一の地点、それがデュ・ベレを先鋒としたプレイヤード派の運動なのである。

4

サント＝ブーヴとペイターの間にはたしかに共通する態度が見られる。みずからの感性が捉えた印象にしたがって、それを記述していく手法はともに「印象批評家」としての冴えを見せるものであるし、いずれも人物観察に際だった才能を発揮する。しかしながら、どこまでも自分の感性を信じて進んでいくペイターに対して、サント＝ブーヴは資料が与える客観的事実を離れることができない。ペイターの分析は、あくまでも自らの印象に沿った線で進められていくのに対し、サント＝ブーヴは自らの印象をも事実の細部に照らし合せて検討しないでは気が済まないのである。

若くして医学を学び、そののちに文壇入りしたサント＝ブーヴは、印象批評家としての姿の蔭で、常に科学的方法論という迷妄につきま

とわれていた憾みがないではない。彼がデュ・ベレを論じる際には、たえず細かい数字と、外科的な解剖にも似た詳細な分析がつきまとっている。これを「実証的な研究と個性の特質を求める印象批評を綜合した」[12] と肯定的に解釈することもできようが、「デュ・ベレ論」に関してコンロンの指摘したように、常に統一を求めながらもそれを得られないという結果に陥る可能性を否定できない。

ペイターもサント＝ブーヴも、ともに、プレイヤード派に代表されるフランス・ルネサンスの運動を、高度に言語的な、人文主義的な運動であると考えていたことは相違ない。ただ、ペイターはそこに単なる資料によっては窺うことのできない統一、そして洗煉を読込もうとしていた。また同時に、中世との連続性にも着目することを忘れなかった。彼等の態度を決然と分つ差異が見出されるとすれば、それはまさに、この立場の相違においてであり、このことが十九世紀を代表する二人の批評家の異なるルネサンス文学観にも反映している。

サラ・ウィスター（Sarah Wister）は1875年、『ルネサンス』刊行後のまだ比較的はやい時期に「ジョアシャン・デュ・ベレ論」を評して、この作品におけるペイターの暗示に富んだ巧みな記述、散文の妙を讃えたのちにこう付け加える。'But if one wishes for the gist rather than the pollen-dust of the matter, it is given by Ste Beuve in the last volume of his "Nouveaux Lundis"'.[13] この評言の穿っている点は、サント＝ブーヴと対照的なペイターの立場、すなわち、ひたすらに事実を求めて細部を明かし個々の矛盾を突くよりも、むしろ、自分の主観が捉えたものに忠実にその時代における精神の昂揚、その一貫性、統一性を訴えようとする立場を把捉しているところにある。ジェニファー・アグロー（Jennifer Uglow）もまたエヴリマン版ペイター選集の序文において、'Pater certainly did not despise the more pedestrian aspects of scholarship and made careful notes of literary and artistic conventions, but he insisted that antiquarian interest alone could not make a work a fit subject for aesthetic criticism' と述べて、ペイターの「審美批評」の特質を的確にまとめている[14]。ペイターは決して事実を軽んじはしな

いが、それに拘泥することはより一層すくないのである。サント＝ブーヴが「考古的関心」の枠を脱することができないとすれば、ペイターは「考古的関心」を超越して「審美批評」へと入っていく。

サント＝ブーヴはプレイヤード派の功績を高く評価しながらも、事実に基づいた、ときとして事実に偏りすぎた記述を加え、客観的に彼等の缺点や矛盾を指摘することで、彼らの運動を統一的に捉える機会を逸してしまう。一方でペイターは、そこに見られる言語意識を軸として常に彼らの統一を描き、ルネサンスの最後の華を読者に印象づけようとするのである。そこには、サント＝ブーヴのように事実に拘泥するのではなく、自ら精神の継承、発展、統一を見出し、それを重んじるペイターのいわば巨視的な態度があった。この巨視的な態度があるからこそ、彼は十二世紀ルネサンスからヴィンケルマンまでをひとつの視野に置いて、ルネサンスを論じることが可能だったのである。

＊本稿は平成９年10月18日札幌医科大学における第36回日本ペイター協会年次大会・研究発表会の発表原稿に加筆修正を施したものである。

注

1）Walter Pater, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*, (ed.) Donald L. Hill (Calif. Univ. Press, 1980) 以下、ペイター『ルネサンス』からの引用はこの版により、かっこ内にページ数のみを記す。
2）Ian Fletcher, *Walter Pater* (Longmans Group Ltd, 1971) p.15.
3）「デュ・ベレ論」末にペイター自身が示した執筆年は1872年である。
4）John J. Conlon, *Walter Pater and the French Tradition* (Associated Univ. Press, 1982)
5）平川祐弘『ルネサンスの詩』講談社。185頁。
6）Conlon, p.63.
7）Charles-Augustin Sainte-Beuve, *Nouveaux Lundis* (C. Levy, 1882–1884), p.279. 以下サント＝ブーヴからの引用はこの版により、かっこ内に巻数とページ数のみを記す。
8）平川、95頁。
9）Pater, p.401.

10) Joachim du Bellay, *Les Regrets précédé de Les Antiquités de Rome et suivi de La Défense et Illustration de la Langue française* (Gallimard, 1967), p.232.
11) 今道友信『西洋哲学史』講談社、1987年。180-184頁。
12) 篠沢秀夫『フランス文学案内』（増補新版）朝日出版社、1996年。207頁。
13) R. M. Seiler (ed.), *Walter Pater: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1980), p.105.
14) Walter Pater, *Essays on Literature and Art*, (ed.) Jennifer Uglow (J. M. Dent & Sons Ltd, 1973), p.xviii.